

学校図書館を核にした情報活用能力の育成

植田恭子（都留文科大学）・豊田充崇（和歌山大学）

大和誠子（株式会社ベネッセコーポレーション）

概要：平成25年度からICT活用事業のモデル校としてタブレット端末ひとり一台体制の環境が整備されたのを機に、国語科における情報活用能力育成カリキュラムの再構築と学校図書館のさらなる機能の充実を目指した取り組みを進めてきた。国語科における「情報活用能力ルーブリック」の開発や生徒たちが学校図書館を拠点として、情報を収集・編集・表現・発信する実践をおこなってきた。これら一連の取り組みにおける情報活用能力向上の成果と、学校図書館を「アクティブ・ラーニングルーム化」した取り組みの一端を報告する。

キーワード：情報活用能力，学校図書館，ICT，国語科，ルーブリック

1 はじめに

学校図書館法に規定されているように、学校図書館は、学校教育において欠くことのできない基礎的な設備であり、「読書センター」「学習センター」「情報センター」としての機能を有している。国語科を中心に学校図書館の機能を利活用し、情報活用能力の育成を目指し、カリキュラム化を図り、単元開発を進めてきた。

平成25年度から大阪市教育委員会「学校教育ICT活用事業」モデル校としてタブレット端末ひとり一台体制の環境が整備された。これを機に、学校図書館を「アクティブ・ラーニング」を展開する拠点として位置付け、その可能性を探りつつ、情報活用能力の向上を目指した系統的な取り組みについて述べる。

2 「学びの場」としての学校図書館の整備

（1）学校図書館の機能

「メディアの多様化と学校図書館」古賀節子（1984）では、学習資料センターの諸機能として、メディア供給機能、指導・助言機能、メディア制作機能、学習・研究機能の4つが示されている。さらにどのようにして従来の図書館を学習資料センターへ変革させるのか、その原動力について「子ども一人ひとりの学習活動を軸

とした教育をみなおすという、いわば教育観の転換」が重要であると論じている。学校図書館の機能の充実と学習者主体の学習活動とは、表裏一体であるといえよう。換言すれば、学習者主体の学習を展開するために、学びの場としての学校図書館の整備を進めていくことが肝要である。

（2）「学習・情報センター」としての学校図書館

「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、生徒の主体的、意欲的な学習活動や読書活動を充実すること」と1998年12月に告知された「学習指導要領」に定められ、学校図書館は「学習・情報センター」としての機能の充実が求められることになった。

機能の充実のためにまず着手したのは、調べ学習に対応できるようにさまざまな種類の事典や国語辞典、漢和辞典、百科事典を複数冊揃えることだった。調べ方、学び方とともに多様な情報の読み、比較読み、分類、出典の明示などの学習も年間カリキュラムに位置付けた。

文学・900以外の総記・000から言語・800の本の配置を進める一方、各クラスの学級文庫をもうひとつの学校図書館として900文学の読

み物を充実させ、中学校3年間で出来るだけ多くの本と出会えるようにした。朝の読書の時間など、本が読みたいと思った時にすぐに本を手にとれる環境づくりを進めた。生徒からのアンケートも参考に「昭和中学校の100冊」を選定、100冊の本の紹介コーナーも図書館内に設けた。一冊読了すると「本の虫カード」に記入するという「読書マラソン」にも取り組み、本に関する情報も共有化を図った。

図書館資料のほか、複数の新聞、新聞のスクラップ、電子資料、ファイル資料、パンフレットや模型等の図書以外の資料についても充実するよう努めた。

(3) 情報交流・発信の場としての学校図書館

学校図書館は書籍や資料が存在する単なる空間でないのは自明のことである。学校図書館という場で情報の交流・発信がなされてこそはじめて意味をもつ。学びの場としての学校図書館における自己・他者・社会と対話を設定した。

国語科の単元に、自己を客観視し、次の学びにつなげる、振り返り、次なる問いを生み出す「自己との対話」、他者との対話により、交流を通して思考力・表現力を高める、学び合う、互いに考えを伝え合うことで深まっていく「他者との対話」、社会への発信、ネットワークによるリアルタイムの交流、日常とは違う社会とつながる「社会との対話」を位置付けた。

また、癒しの場、「居場所」として、自己と向き合える場所も図書館内に設けた。

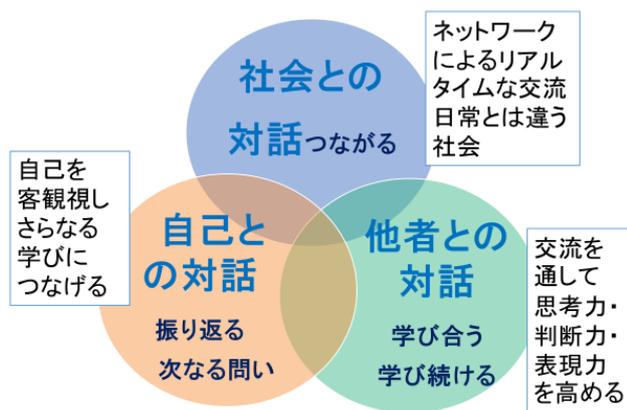


図1 自己・他者・社会との対話

(4) 「アクティブ・ラーニングルーム」としての学校図書館

I C Tモデル校に指定され、学校図書館にLAN環境が整ったのを機に、電子黒板、無線画面転送装置、ホワイトボード、コンピュータ、タブレット端末を整備した。タブレット端末により、最新の情報をいつでも調べることが可能になった。同時にグループディスカッション、グループワークなどに対応するグループ学習仕様の机の配置にした。大きくフラットな机はグループ学習には必須のものである。

室内も最新の情報や思考ツールなど「なぜ」「どうして」という「問い」を生み出す環境づくりに努めた。「もっと知りたい」「もっと学びたい」という知的好奇心に応えるために学び方を学ぶテキスト「学びの手引き・EXノート」を作成し、授業で活用することにした。

I C T環境が整ってからは、担当する国語科の授業すべてを学校図書館で行うようにした。



図2 学校図書館におけるI C T環境



図3 学びの場としての学校図書館

3 中学校国語科における情報活用能力の育成

新学習指導要領では、学習の基盤となる資質・能力として言語能力や問題発見・解決能力とともに「情報活用能力」が位置づけられている。言葉を学習対象とし、言葉を仲立ちとして情報を扱っている国語科において、田近洵一（1998）の指摘にあるように、情報活用能力は、国語学力の中核に位置づけられるものであると考える。中学校国語科において、新聞をはじめ多様な情報を学習材として活用し、3年間のカリキュラム、情報活用能力ルーブリック（表1）を作成し、それをもとに実践を重ねてきた。

情報活用能力育成にあたっての学習の流れは、課題設定⇒情報収集⇒情報の編集・表現⇒情報の発信・伝達⇒振り返り⇒とし、田近洵一（1996）「自立と共生の行為としての自己学習行動」をもとに作成、単元の柱とした。

4 表現活動におけるICT活用

生徒たちが学校図書館を拠点として、情報を収集・編集・表現・発信する実践をおこなった。自らの課題に関わりタブレット端末などをツールとして活用し、そこで獲得したものを表現、それに対する思いや考えを交流するなど表現活動におけるICT活用を進めてきた。

なかでも動画制作は、相手意識をもった表現活動であり、制作する上でグループでの連携、協力なくしては成り立たない協働的な学びである。インターネットの普及により、誰もが情報の発信者になれる時代である。情報の送り手体験は、国語科における情報活用能力の育成に効果的であると考え、実践に取り組んだ。中学3年間での動画制作は以下のとおりである。

- 「徒然草」グループで章段を選び動画制作
- 「ことば食堂へようこそー昭和中学校バージョン」慣用句についての動画制作
- 「世界に誇れる日本の○○ー1分間のCM」
- 魯迅の「故郷」について挿し絵を活用して動画制作
- 創立70周年昭和中学校のCMづくり（図4）



図4 CMづくりの相互評価

5 成果と課題

3年間の国語科の学習の振り返り等から、成果として以下のことが考えられる。

- ①ICTを効果的に活用することで情報活用能力育成につながった。
- ②学校図書館での学びにより、メディアの特性を活かしたアナログとデジタルの融合が自然に進められた。いつでも調べられるという環境は学びに向かう原動力となった。
- ③学校図書館という空間で学びの連続性が担保でき、長いスパンの単元学習を可能にした。
- ④他者との意見交流もスムーズにでき、学び合い高め合うことが日常化した。
- ⑤情報の交流で多様な考えと出会うことが可能になり、自分の考えを深めることにつながることを実感し、活発な意見交換へとつながった。
- ⑥学校図書館という教室とは違う学びの空間は、知的好奇心を喚起、協働的な学びを生み出した。

情報活用能力の育成の観点から国語科に期待されるものは大きい。国語科の学習は情報活用能力育成の基盤をなすものである。

今後、「情報」そのものについて考察する単元の開発、他教科との連携、カリキュラム、ルーブリック、学校図書館のあり方等について、実践の評価、分析を通して、再考していきたい。

参考文献

- 塩見昇（1989）『学校図書館論』教育資料出版会
- 田近洵一（1996）『国語教育の再生と創造◎21世紀へ発信する17の提言』教育出版

情報活用能力ルーブリック（表1）

国語科で育成したい7つの情報活用能力（例）	「自立と共生の行為としての自己学習行動」（田近洵一・1996）より	活動内容	S：よくできる ※A以下紙幅の関係で省略
1 課題設定 ・「問い」をもつ。	問題を発見し、それを基礎に課題を設定する。 （問題発見・課題設定の能力）	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な情報を読む。 ・情報を継続して読む。 ・得た情報を交流する。 	多様な情報の背景や意図を読み解き、今日的課題をとらえ、意識をもち、「問い」が設定できる。
2 ・見通しをもつ。 ・必要な情報を知る。	課題解決の方法や手順、必要な資料などについて見通しをもつ。 （学習構想・学習計画の能力）	・情報を取り扱う技法(KJ法、ブレインストーミング、ランキング、マッピングなど)を使いこなす。	自らが設定した課題を解決していくための方法や資料について見通しをもって、自ら取り組んでいる。
3 情報収集 ・検索の手順を考える。 ・探す。 ・見つけ出す。 ・調べる。 ・収集する。 ・選択する。	<p>ア 情報源(他者)のオリジナリティ(他者の発想・論理の独自性)をとらえる。</p> <p>イ 価値ある情報を発見する。また、必要な情報を収集する。 （情報受容・他者理解の能力、情報収集・情報選択の能力）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・図書館の検索方法を身につける。 ・新聞情報を比較して読む。 ・信頼のおけるWebページの情報を収集する。 ・様々な種類の文章から必要な情報を集める読み方を身につける。 ・情報の扱い方(カードや付箋、思考ツール、図表など)を用い情報を整理する。 	<p>課題意識を明確もって、情報検索の手順にそって、複数の情報源から自分にとって価値ある情報を探して出している。</p> <p>課題や目的に応じた方法で信頼性の高い複数の情報を収集し、必要な情報を取捨選択し、情報を適切に整理している。</p>
4 ・取り出す。 ・とらえる。 ・関係づける。 ・思考する。 ・編集する。 ・再構成する。	個々のデータを関係づけ、構造化して、認識を形成(情報を再構成)する。 （関係づけ・構造化の能力）	<ul style="list-style-type: none"> ・収集した多様な情報を共有する。 ・課題解決につながる様々な文章を読み、必要な情報を選び、自分の表現に役立てる。 	収集した多様な情報の中から、課題解決につながる情報を読み解き、自分の考えや表現に役立てている。
5 ・まとめる。 ・表現する。 ・提示する。 ・分析する。	情報を批判的に受容し、批評するとともに、得た情報を評価する。(文献批評・情報評価の能力)	<ul style="list-style-type: none"> ・収集した情報の意図や背景を考えながら、真偽を評価、分析する。 ・相手の立場、考えを尊重し、目的に沿い、効果的に展開するよう聞き分け、自分の考えを深める。 	活用したい情報が適切なものかを再評価しながら、どうすれば相手にわかりやすく伝えられるかイメージを描き、伝えたい内容に応じた適切な形式を選択し、表現している。
6 情報の発信・伝達・伝える。 ・交流する。 ・対話する(自己・他者・社会)。 ・情報手段を選択する。 ・共有する。	情報を再生産(学習内容を整理)し、発表する。 （情報再生産・自己表現の能力）	・構成を考えて、決められた時間内で発表・相手や目的に応じて、文章の内容や表現を変える・目的や方向に沿って建設的に話し合う。	効果的な情報手段を選択し、相手意識をもちながら、聞き手の反応を確認しつつ、臨機応変に情報の発信ができる。
7 振り返る ・評価する。 ・問題点、改善点を見いだす。 ・次の「問い」をもつ。	<p>ア 他者を媒介にして自己を相対化する。</p> <p>イ 自分の情報処理活動のあり方(学習成立過程)を振り返り、自己評価する。(自己相対化・自己批判の能力・自己評価・自己批評の能力)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自己評価、相互評価によって学びのプロセスを振り返る。 ・思いや考えが伝わったかを検証する。 ・次につながる課題意識をもつ。 	<p>自分の活動や学習の成果、学びのプロセスを振り返り、他の学習者との交流もふまえて、振り返ることができる。</p> <p>情報発信の成果、問題解決のプロセスをもとに、残された課題を確認し、次への課題をもつことができる。</p>